

第1回海陽町学校のあり方検討委員会
議事録

日 時：令和3年12月3日（金） 10：05～11：30

場 所：海南文化館 大会議室

出席者：委員16名中13名出席（別紙名簿参照）

事務局：（担当課）海陽町教育委員会 三浦教育長、森崎教育次長、浦川主査
（受託者）リージョナルデザイン株式会社 安孫子氏、佐々木氏

■議事1 委員会スケジュール

事務局・森崎教育次長から説明

（登井委員長）

ただ今の事務局の説明につきまして、ご質問ありませんか。

※異議なし

（登井委員長）

異議なしというお声もありますが、令和4年10月に予定しているヒアリングの主要な団体とはどのような団体を考えているのかということと、アンケート調査はどのような対象で行うのか、誰が中心となって集計・作成するのかが分からないので、教えてください。

（事務局・安孫子）

主要な団体やアンケート調査そのものについても、この委員会の中で皆さんのご意見を頂いて、その是非々々をとることと考えています。主要な団体につきましては、骨子案をまとめた段階で、委員の皆様の方から意見を頂いたところに調査をかけて、その骨子案に対しての是非々々を委員会で検討することを念頭に置いています。アンケート調査は、現段階では想定としています。面談式の聞き取りが望ましいと考えていますが、新型コロナウイルスの蔓延等が想定された場合は、アンケート調査で置き換えることも念頭に置いています。

（事務局・三浦教育長）

地域の住民の方であるとか、さまざまな声を幅広く吸い上げて、方針を作成していきたいと考えていますので、こういうところの意見を聞いたらどうかということがありましたら、検討委員会の中でお出し頂きたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

(登井委員長)

事務局や委員に負担をかけることなく、受託者が中心となって進めるということで、安心しました。他に意見がないようですので、次の議事に移ります。

■議事 2 学校再編のこれまでの経緯

・事務局・森崎教育次長から説明

(登井委員長)

ただ今の事務局の説明につきまして、ご質問ありませんか。

(事務局・三浦教育長)

この当時の統合計画には、学校でクラス替えができる、つまり1学年1学級でない学級をつくりましょうという適正規模、そして小学校2校・中学校2校を目指す体制が書かれています。既に中学校は2校体制になっていますが、小学校は3校体制です。しかし、将来的にクラス替えをしようとする、小学校1校・中学校1校体制を目指すしかない状況です。

海南小学校と海陽中学校が教室の数が一番多いことから、例えば、穴喰小学校を海南小学校へ、穴喰中学校を海陽中学校へもってくるとなると、穴喰小学校・穴喰中学校の児童生徒の通学が困難になります。そういうこともあって、穴喰小学校・穴喰中学校を残した形の2校・2校体制を目指していこうなっています。つまり、穴喰中学校区に中学校1校・小学校1校、そして海陽中学校区に中学校1校・小学校1校、海部小学校と海南小学校が再編をするということが、この計画には書かれています。

しかし、クラス替えをするには、将来を見据えると小学校1校・中学校1校体制を目指すしかないということも書かれています。

(登井委員長)

ただいま説明がありましたように、平成20年度に出された統合計画の内容は、クラスの人数がどうなるかということで、統合を考えていったということです。「海部小学校と海南小学校が統合するのであれば、平成26年度あたりに統合を実現する必要があると考える」と書かれてあります。そして「平成22年度にその話を立ち上げて、平成26年度に向けて取り組んでいく」とありますが、その話はこれまでに生まれませんでしたよね。

(事務局・三浦教育長)

海部小学校と海南小学校が統合・再編するときには、海部小学校の児童数の現状をみて、見定めたいえで判断すると統合計画には書かれてあります。そのなかで、海部小学校の児童数が大きく変化をせず、最近はやや右肩上がりにきているという状況であったことから、検

討委員会が立ち上げられませんでした。しかし、今後5年先をみていきますと、それぞれの学校も児童数が減ってくるとみてとれます。そういうことから、今がいろんな形を考える時期と捉え、教育委員会でも4～5年先を見据えて今から話し合いをはじめましょうということになり、検討委員会を開催したということです。

(登井委員長)

みなさんから質問等ございませんか。

(谷本委員)

海部小学校の全校児童44名とずっと横ばいで、減らずにきていますが、ずっと出生数など減ってきていますので、考えていかないといけないということがよくわかります。

(岸委員)

海部校区と海南校区の小学校の合併が次の段階ということでしたが、私が一番いたいのは、中学校の学級数を2つにさせていただきたいということです。子どもの人権や命を守ることが大切です。クラス替えの表を見て泣いた子もいるくらい、厳しい学級もあるようです。

穴喰中学校の子どもの人権や命を守るためにも、辛い思いをしている子どもがいないかということも考えて、中学校も早急に検討していただきたいと思います。

(登井委員長)

それも含めながら話し合っていくということで、よろしくお願いします。

(皆津副委員長)

学校があるのとないのでは、地域の活性化という点でまったく違います。極端にいうと、学校は文化の中心であると私は考えています。地理的・人数的なことだけで判断するのではなく、住民として地域全体のことも考えていただきたいと思います。

(登井委員長)

学校がひとつなくなるということが、本当に大きなことだということは、みなさんもお感じになっていると思います。ですから、みなさんもいろんな意見を出していただいて、将来海陽町の子どもたちが、どんな形で学んでいったらいいのか、この会で具体的に検討していければと思います。

最後にご意見をいただく場もありますので、次の議題に移らせていただきます。

■議事3 文部科学省公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引

・事務局・森崎教育次長から説明

(登井委員長)

ただ今の事務局の説明につきまして、ご質問ありませんか。例えば、幼小中高の連携やICT、英語教育のことについて出てきましたが、それに対する具体的な説明を求めてもいいので、何かありませんか。

(登井委員長)

私から質問しますが、ALTはすべての学校に配置されているのでしょうか。

(事務局・森崎教育次長)

ALTは、中学校卒業時に簡単な英会話ができるレベルまで高めていきたいということも含めまして、本来より多い配置をしています。現在、ALTは2人、国際交流員は2人、そしてグローバル教育の推進員もいて、これからも人数が増える可能性があります。ただ、各校1人ずつという状況ではありません。

(事務局・三浦教育長)

グローバル教育ということで、英語推進のために、JETプログラム(語学指導等を行う外国青年招致事業)で、ALTとCIR(国際交流員)を国の施策として配置しています。ただ、グローバル教育の推進員は、町が単独で雇用しています。ALT、CIR、推進員合わせると、7人います。

(登井委員長)

幼稚園や保育所でも活用していただいているということで、英語教育が大変進められているなという印象です。

(岸委員)

適正規模についてですが、保育所は人数によって配置基準が異なります。また、地域に応じて異なります。小学校というのは、全部一律で適正規模が決まっているのでしょうか。

(事務局・三浦教育長)

国からは、1学級最大40人と示されています。ただ、1人でも学級ができないことはありません。ですので、何人いなければいけないということはありません。

ただ、複式学級だけは、小学校は2つの学年に渡って16人となっています。小学校1年生を含む場合は、合わせて8人です。現在、海部小学校は、2年生・3年生、4年生・5年生が複式で、2学級となっています。ただし、県から教員を配置してくれています。それか

ら、町も配置していますので、複式学級は解消しています。書類上は複式学級ですが、正式には複式を解消した形で、1学年1学級として教育活動が進められています。

ですので、何人いなければいけないという基準はありません。

■議事4 本町の年次別児童生徒数の推移と学級編制基準人数について

・事務局・森崎教育次長及び三浦教育長から説明

(事務局・三浦教育長)

穴喰小学校と穴喰中学校は一貫校となっているという説明をしましたが、これについて補足します。徳島県では、ほとんどの学校が国の適正規模を満たしていません。その中で、徳島県教育委員会は、小規模の学校を存続させるために、小・中学一貫校をモデル校として実証しています。小規模校を残していく方向で、徳島県は動いています。穴喰小学校と穴喰中学校につきましては、3年前にモデル校に手をあげました。児童生徒の交流、教員の交流、マラソン大会や教員の研修などを一緒にしたりしています。両校は少し離れた場所にあり、これを徳島モデルではチェーンスクールと呼んでいます。牟岐町のように小・中学校が同じ敷地内にある場合は、パッケージスクールと呼びます。

あと、教員に兼務辞令が出ます。この教科は、小学校の教員が中学校に行ったり、その逆もあります。そうして、小規模校のデメリットを解消しています。これが、徳島県が進めている方策のひとつです。

(登井委員長)

実際に運営されている福田委員に、より詳しい説明をお願いしたいと思います。

(福田委員)

この間も会があって、穴喰中学校の体育館で、6年生と中学1年生が合同で学級会活動をしました。穴喰小学校の担任の先生は、今の穴喰中学校の1～3年生も見ており、話合い活動がずっと積み重ねられています。

非常に好評で、子どもたちは活発な意見がどんどん飛び交いました。話し合い活動が、新しい学習指導要領に非常に合っています。そして、それをすることで、深い学びの実現へと結びつけることができます。穴喰小学校と穴喰中学校が連携することによって、子どもたちの人数は少なくとも、深い学びが可能であることが実証できています。

また、入れこみとか乗りこみといった先生の交流をすることで、先生の負担感も非常に少ないです。このようなメリットを活かすことで、もっと進めていけるのかなという実感もっています。現在は、コロナで非常にコンパクトな形で交流していますが、オミクロン株さえクリアできれば、交流活動が活発にできるのかなと感じています。もしお時間がありまし

たら、委員のみなさんに見に来ていただけたらと思います。

(登井委員長)

ありがとうございました。せっかくの機会ですので、事務局と相談しながら年間スケジュールに見学の時間を盛り込めたらと思います。これはまた、委員の皆さんに相談しますので、ご検討よろしくをお願いします。

(辻委員)

小学校は、何人以上いたら2クラスになるのでしょうか。先生方の負担にも関わってくるかと思えます。

(事務局・三浦教育長)

学級編制基準人数というのがありまして、国は小学1年生と2年生が35人で1学級となっています。よって、36人になれば2学級になります。71人になれば3学級になります。3年生以上は現在40人ですが、これから毎年35人になっていき、令和7年度にはすべての学年で35人学級になります。ただし、県の基準はすでに全学年35人になっています。

国は、この学級編制基準で学級数が決まって、教員の数が決まります。例えば、36人の学年があれば、県の基準では2学級になりますが、国の基準では2学級になりません。ですから、国から教員は2人配置してくれません。その代わりに、県が単独で教員を1人配置してくれます。それで、学年が2学級に分かれます。

中学校は、国は今のところ変わりなく40人学級のままですが、県は35人です。特別支援学級は、小・中学校ともに、国も県も8人となっています。

教員の定数は、学級数で決まります。ただ、養護教諭や栄養教諭、事務職員は、この定数には含みません。

■議事5 海陽町立小・中学校適正規模・適正配置検討基本方針

・事務局・三浦教育長から説明

(登井委員長)

「教育的視点」「地域連携の視点」「まちづくりの視点」「学校施設の適正化の視点」の4つの視点について説明をしていただきました。今まで話をしてきたことが、随分この中に入っていると思います。今後分からないことがあれば、さまざまな視点で質問をしていただくと、深みが増していくと思います。

実際にコミュニティ・スクールを導入し、実践されている村田委員どうでしょうか。

(村田委員)

地域連携の視点ということでコミュニティ・スクールをあげられていますが、本校もコロナの影響もありましたが、その中でも地域にある自然、人、お祭り等の行事などを教育活動の中に積極的に取り入れて、学習活動を進めています。子どもたちも身近な教材に触れることで、学習意欲も高まっています。今後の学校教育という視点では、コミュニティ・スクールをより活性化させていきたいと考えています。

(登井委員長)

それぞれの学校施設が古くなってきたとのことですが、今年度は改修などあるのでしょうか。

(事務局・森崎教育次長)

優先順位をつけて予算のヒアリングを受けながら直しているという状況です。子どもが危険な状況にならないように、予算に限りがある中で対応しています。ただ、コロナの交付金等の関係で多方からの援助があり、衛生部分などについては充実しているのではないかと思います。夏場の暑いときの体育館等のクーラーなども整備しているところです。

全体的なところでは、施設の適正化計画は町の総務管轄でやっている部分と、教育関係でやっている個別の施設計画がありますので、それに基づいて長寿命化を含めながら、この検討委員会と整合性を保ちながら、整備を進めていきたいと考えています。

(登井委員長)

劣化による修繕・更新とありますが、更新というのはアップグレードも含むということでしょうか。ICT教育を推進するには、かなりお金がかかるのではないのでしょうか。

(事務局・森崎教育次長)

おっしゃる通りです。タブレットに関しては、特に先駆的に議会の方も認めていただいた流れがあります。県下では一番最初にタブレットを児童生徒に配布できたのではないかと考えています。タブレットがあるだけではだめですので、今後はその活用も含めて、ソフトも同時に進めていっています。金額は大きな金額がかかります。

(事務局・三浦教育長)

さきほど適正化や更新といった話が出ましたが、特に防災面において、央喰小学校では8年前の台風で体育館の1階部分が浸水しました。この前の9月も、線状降水帯で駐車場あたりまで水がきました。央喰小学校は、特に津波避難について、今のところ愛宕山に避難していますが、愛宕山も高くありません。避難所の問題など、子どもたちの防災面、安全安心な学校生活という観点も含めて、一体的に検討していかないといけないと考えています。

(登井委員長)

防災、タブレットのことなど、これからいろいろと検討しないといけないことも出てくるかと思います。委員の皆さんも次回までにお考えいただいて、議題にあげていただければありがたいと思います。

■その他

(皆津副委員長)

海部郡には高校は1つしかなく、独特な地域環境にあります。海部高校と中学校の交流はしていると思いますが、小学校とのかかわりも大事かと思います。そのあたりの現状はいかがですか。

(事務局・三浦教育長)

現在は、園校長会に海部高校の校長先生も毎回出席していただいています。高校の現状や進路状況などについて、情報交換をしています。海陽町は、就学前から高校までの教育が完結できる環境が整っています。海部高校のあり方についても、地元の海陽町が支えていかないとはいけないと考えています。また、現在コロナで開催できていませんが、就学前から小学校、中学校の保護者を対象に、海部高校の学校説明会をしています。町の学校活性化協議会の中で出てきたことで、今後も継続していく予定にしています。

(登井委員長)

他に意見がないようですので、事務局から次回の開催予定について説明をお願いします。

(事務局・)

今回は、来年2月の開催を予定しています。今回と同様に、案内通知をお送りしますので、ご出席をよろしくお願いいたします。

(登井委員長)

本日の話し合いの内容を持ち帰っていただいて、いろいろと考えをまとめていただければと思います。最後になりましたが、設置要綱に守秘義務についても書かれていますので、そのあたりも考慮していただきたいと思います。これで、第1回海陽町学校のあり方検討委員会を閉会します。本当にありがとうございました。

閉会